T3M

本科 2 期 12 月度

解答

Ｚ会東大進学教室

慶大小論文

24章

【添削課題】

出典…中央大学・総合政策・00年

解答

【文章例①】

筆者は、集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊すると主張する。ここでいう「安心」とは、集団の内部で相互協力が簡単に成立し、内部の仲間とだけつきあっている限りは、ひどい目にあうことを警戒する必要がない状況をいう。この集団主義社会の「安心」が見られる社会は、近代以前の伝統的な村落共同体、一般的には社会学でゲマインシャフトと呼ばれている共同体社会、さらには日本のビジネス社会である。「信頼関係」が醸成されるまでは時間がかかるが、一度「信頼」が醸成されれば契約書に頼らず、電話一本で取り引きが成立する。

一方で、集団主義社会が破壊する「信頼」とは、ゲマインシャフトにおける「信頼」とは異なる、仲間内を超えた他者一般ないし人間性一般に対する「信頼」である。この一般的信頼は人々を固定的な関係から解き放ち、新しい相手との間の自発的な関係の形成に向かわせる、関係拡張の側面を持つ「信頼」である。筆者は、集団主義社会は仲間内の「安心」を生み出すが、一般的「信頼」を育ちにくくするという。そして「安心」に安住する閉鎖的な社会の「機会コスト」が大きくなるため、日本社会の課題として、一般的信頼の醸成を提唱する。

私は筆者の主張に賛同し、これからの日本社会は一般的信頼の醸成を目指すべきであると考える。問題を考察するための例として、日本の大学を挙げる。

一九八〇年ごろまで、日本の国立大学では外国人が教授になることができなかった。制度自体は改善されたものの、実際の人事における閉鎖性はその後も続き、外国人の採用はそれほど進まなかった。この背景として、日本の大学における人材採用では、学閥・派閥

といった集団内部での人間関係をベースとした、内向きの原理が支配的であったことが考えられる。

確かに、このような「顔の見える」長期的な人間関係をベースとした人材採用には、一定程度「取り引きコスト」を節約できるというメリットがあっただろう。しかし、今日の多くの学問研究、特に理系学問の多くでは、グローバルな規模での競争が当たり前となっている。日本の大学における人材採用は、こうした状況に対応できず、結果として、海外から優秀な研究者を採用する機会を逸したのではないか。それだけでなく、公正な業績評価によって世界中から人材を集める海外の大学への、国内からの頭脳流出も招いたのではないか。これは日本社会にとって大きな「機会コスト」であり、現在日本の大学が世界の大学ランキングで苦戦を続けていることの一因であるように思えてならない。

以上より、国際化が一層進む二十一世紀の日本は、集団主義社会の「機会コスト」により敏感となるべきだと考える。他者一般に対して開かれた「信頼」に基づく人材採用や業績評価が行われる、開かれた機会を重視した社会への転換をはかるべきだと考える。

【文章例②】

筆者は「集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する」と主張する。人々が集団の内部で協力しあっている程度が、集団間で協力しあっている程度よりもずっと強い集団主義社会の内部では、相互協力が簡単に成立している。それゆえ、集団内部の仲間と付き合っている限りは、人に利用されたり搾取されたりすることを警戒せずにすむが、自集団の仲間うちを越えた他者一般や人間一般に対する信頼が育ちにくくなる、と考えるからである。そして、これまでの日本社会は閉鎖的集団主義型の安心社会を確立することで、社会や経済の効率的な運営を達成してきたが、今後は人々の間に特定の集団や関係の枠を越えた一般的信頼を醸成することで、開かれた機会重視型の社会へと転換してゆく必要がある、というのである。

確かにこれまでの日本の社会は、筆者が述べているように外部に対して閉鎖的で固定的な組織や集団を敢えて形成し、そうした集団の内的な凝集力と安定性を核に据えて経済的発展を実現してきたといえる。終身雇用制や年功序列制という日本独特の雇用制度は、人々が少なくとも定年までを、長ければ一生涯をある特定の企業の中だけで過ごし、終生を一企業に捧げることが美徳である、という欧米諸国では考えられない倫理観念さえ生み出すこととなった。

だが、その結果自分の会社の利益のためであれば、社会全体の利益を損なっても仕方がない、という閉ざされた価値観が形成され、企業活動が多くの一般市民や社会一般の信頼に対する重大な背反行為につながるという事態も頻繁に見られるようになった。高度成長

期に日本各地で発生した公害問題にしても、結局は、このように日本の柔軟性を欠いた雇用制度と企業組織のなかで、社会一般に対する倫理意識と責任への配慮が人々の間から失われてしまっていたために生じてしまった問題であろう。

しかし、人々がいつのまにか社会全体に対する誠意や責任を見失ってしまうような閉鎖的制度によっては、より長期的には健全な活力に満ちた社会を形成し、実現していくことは困難だ。筆者のいうような開かれた機会重視型の社会に転換することは、人々を自立させ、社会一般に対する責任と倫理意識を明確なものにしていくためにも極めて重要な意義を有していると、私は考えるのである。

解説

1　設問要求

① 課題文を簡潔に要約して示す。
② 課題文に示された筆者の見方に対する賛否を含めて、これからの日本社会のあり方について自分の意見を述べる。
③ 一〇〇〇字以上一二〇〇字以内にまとめる。
④ 論旨を明快にするため段落をつける。

2　課題文の読解

まず、段落に沿って課題文全体の論旨を読み取っていこう。

◆課題文の中心的なメッセージ＝集団主義社会は安心を生み出すが信頼を破壊する。

◇「集団主義社会」の定義
＝「内集団ひいき」の程度がとくに強い社会（＝人々が集団内部で協力しあっている程度が、集団間で協力しあっている程度よりもずっと強い社会）

◇「集団主義社会」の典型例とその特徴
＝近代以前の伝統的な村落共同体：社会学でゲマインシャフトと呼ばれている共同体的社会（→家族）

＝集団の内部では相互協力が簡単に成立している。内部だけでつきあっている限りは、人に利用されたり搾取されたりすることを警戒する必要がない。

◇「集団主義社会が安心を生み出す」という側面

＝現代日本のビジネス関係＝取り引き相手との間にまず「信頼関係」を作り上げる。

↑時間がかかるが、いったん「信頼関係」が成立すれば、その関係内部では強固な協力関係が存在するため、契約書で身を守らなくても安心して取り引きができる。＝**集団主義的な関係↓【関係内部で安心していられる関係】**

◆「集団主義社会」のマイナス面を考える意義

＝「信頼を破壊する」という面を考えることが、これからの日本社会のあり方を考えていく上で重要な意味を持つ。

◇「集団主義社会の閉鎖性」

＝仲間うちでは安心していられるが、仲間を越えた他者一般や人間一般に対する信頼が育ちにくくなる。

◇これからの日本社会

＝これまでのように関係を外部に対して閉ざすことで関係内部での協力態勢を確立していくやり方↓社会・経済的効率の達成の足枷になっていく。

◇一般的信頼の重要な役割

＝信頼は、人々の間の結束を強める関係強化の側面と同時に、人々を固定した関係から解き放ち、新しい相手との自発的な関係の形成に向かわせるという側面もある。＝**【関係拡張の側面】**

◇日本社会の変質

従来＝集団の凝集性を高め、外部に対して閉ざされた関係の内部で相互協力態勢を確立し、社会や経済の効率的な運営を達成。

現在＝関係を外部に開くことの効用の方が大きくなった。

◇「取り引きコスト」の重視

従来＝「取り引きコスト」の節約＝特定の相手との間の安定した取引関係の確立：終身雇用制における雇用者と被雇用者との間の安定した雇用関係など。

→〔新しく別の相手と取り引きをすれば得られたはずの利益〕－〔現在の相手との取り引きで得ている利益〕＝**【機会コスト】**

◆「機会コスト」の増大

＝現代の日本社会では、経済やビジネスの分野のみならず、あらゆる領域で機会コストが急速に増大しつつある。

◆日本社会転換成功の鍵

＝従来の**【閉鎖型】**ないし**【集団主義型の安心社会】**から**【開かれた機会重視型の社会】**への転換に成功するかどうかが鍵。

＝人々の間に特定の集団や関係の枠を越えた一般的信頼が醸成されるかどうか→どのようにしてそのような一般的信頼を醸成できるかが社会科学や人間科学に与えられた重要な課題の一つ。

3　課題文の考察

課題文の読解に基づいて、いくつかの重要な論点について確認してみたい。

①　筆者の基本的な立場

筆者の立場と主張は極めて明解である。これまでの日本は外部に対して閉鎖的で、内部的な信頼関係を形成することで、「関係内部で安心していられる関係」を確立し、その内部での相互協力態勢に基づいて社会や経済の発展を実現してきた。つまり「集団主義社会」のシステムによって現在に至る社会的・経済的発展と繁栄を達成してきたというのである。

そのため日本の社会はあらゆる領域に「集団主義的」な制度や慣行、価値観が浸透している。筆者があげている企業間の取り引き慣行や終身雇用制の他にも、たとえばどの会社のなかにも存在する学閥（同じ大学の出身者同士での私的相互協力を行う集団）や派閥、自分の地域内の利益を重視する地域行政の在り方、社会・経済制度の異なる国に対して冷淡な外交政策など、日本の社会

や国家のあらゆる領域に、集団主義の閉鎖的傾向が見て取れる。

だが、このように閉鎖的で内部にしか目を向けない構造においては、必然的に人は外部に対する猜疑心を強くすることになる。また、従来の安定した固定的な関係を壊す危険を冒してまで新しい関係を求めることに不安や躊躇を覚えることにもなる。それゆえ、ひろく外部一般に対して開かれた信頼を持つことのできない集団主義社会は、周囲の状況が大きく変動して行く時代になると、柔軟に対応することができず、窮迫していかざるを得なくなる。筆者がこれからの日本は集団主義社会からの転換が必要であると考える背景には、世界全体の関係や状況が大きく変化しつつある現状への認識が存在するのである。

②「取り引きコスト」と「機会コスト」

課題文の中で重要なキーワードとして用いられている「取り引きコスト」と「機会コスト」という言葉の意味を整理しておこう。

【取り引きコスト】

特定の相手と安定した取り引き関係を形成し、確立し、保持するために必要とされるコスト（＝手間・労力・経費・犠牲など）。日常生活の場面ではお中元やお歳暮なども「取り引きコスト」の面を持つ慣行である。また、従来からの取り引き先との関係を維持するために、別のもっと利益の高い新規の契約を結ぶことは断念する、などといったこともしばしば行われている。これは長期的な安定した取引関係の方が、結果的には大きな利益を得られるという判断に基づいた選択である。

【機会コスト】

〔新しい相手と取り引きをすることで本来得られたはずの利益〕－〔現在の相手との取り引きで得られている利益〕を指す。社会的・環境的変動が少なく、固定的な状況が続く場合には、固定的関係によって得られる利益が大きいので、機会コストは低いが、社会的・環境的な変化が急激で大きい場合には固定的関係によって得られる利益は小さくなるので、機会コストは高くなる、と筆者は考えている。

③　社会的・環境的変化の具体的内容

課題文では、日本の社会が直面しつつある社会的・環境的変化について、具体的に述べられてはいないが、次のようなことが念頭に置かれているものと考えられる。

(1) 日本経済の深刻な経済危機

バブルの崩壊に端を発した経済危機はいまだに深刻な状況が続いている。そのなかで、現在日本の経済構造自体を再構築する必要性に迫られている。いわば、日本が経済的に生き延びるための徹底した変革があらゆる経済領域で求められているわけで、その変革に対応できるか否かがまさに各企業にとっても個々人にとっても死活問題となっているのである。

そのなかで、たとえば従来の終身雇用制や年功序列制といった雇用システム、親会社と子会社との固定的契約関係など、戦後の高度成長の背景となった日本独特の制度の見直しも進められている。

(2) グローバル化の進展

世界経済の緊密化と一体化がこれまでにない規模と速さで進行し、日本もまたそうした「グローバル化」の波に対応する必要がでてきた。多様な文化や伝統を有し、様々に異なる政治・経済制度やビジネス慣行を持つ国々との商取引・経済取り引きが不可欠となったのである。

こうした時代的な変化に対応するには、これまでの集団主義的な発想では対応しきれない。集団主義的手法は、同質性の高い者同士でなら有効に機能するが、異質の価値観や慣行を持つ者同士では有効性が期待できない。

この点からも、日本の社会は変化を求められているのである。

4 答案作成の指針

答案作成の方針を示しておく。参考にしてほしい。

① 要約

まず設問では、課題文の内容を簡潔に要約することが求められている。課題文の読解を参考にしながら課題文全体の基本的な内

容を確認し、整理してまとめてみよう。

整理にあたっては、自分の言葉に恣意的に言い換えてしまうのではなく、課題文の中で用いられている筆者の言葉や表現を最大限に活用してまとめることが望ましい。特に、「集団主義社会」の定義や内容、「取り引きコスト」と「機会コスト」などといった重要な語彙の記述に際しては、筆者自身の説明を利用する方が内容的に課題文の趣旨から外れる危険が少ない。

内容的には、従来の「閉鎖的集団主義型の安心社会」がもはや限界に直面しており、より一般的な信頼関係に基づいた「開かれた機会重視型の社会」へと転換していくことを現在の日本の社会は迫られているのだ、という筆者の基本的な視点が明確に示されている必要がある。

以上の点に留意しながら、誤字や脱字にも注意して要約部分を作成して欲しい。

② **考察**

設問には「ここに示された見方に対する賛否を含めて、これからの日本社会のあり方について意見を述べなさい」とある。つまり、漠然としたかたちで意見を述べるのではなく、筆者の主張に対する肯定・否定を明確に示し、論点を具体的に絞り込みながら自分自身の見解を論じていくことが求められているのだ。

例えば、筆者は日本の従来の雇用制度を改革する必要があると考えている。閉鎖的かつ固定的なこれまでの雇用制度では、真に実力を持った人材が育たないし、また新たにそういう優秀な人材を途中採用することも難しいからだ。確かによほどのことがない限りクビになることもなく、勤続年数に応じて一定の地位と昇給が保証されているような境遇であれば、次第に積極的に自己を向上させ、新しい仕事に挑戦しようとする気概も薄れてくるかもしれない。このような傾向が企業全体の傾向になってしまうならば、その経営効率は極めて低いものになってしまう。そして、経済危機と国際化という激しい経済環境の変化に対応していくことも困難になってしまうだろう。それゆえ、筆者の主張するように、より個々人の実力と実績を重視する雇用制度に転換していくことが望ましい。そして、固定的で閉鎖的な雇用制度の改革は、日本の社会により一層の柔軟性と開放性とをもたらしてくれるだろう、と肯定的に論評することが可能である。

一方、経済的苦境の時期であるからこそ、強引に従来の制度や慣習を切り替えていくことは危険が大きすぎると批判的に論じることもできる。例えば、現在のような不況で先行きの見えない時期に終身雇用制などの安定と信頼関係に基づいた制度を改めてい

くことは、大半の人々にとっては生活や将来への不安しかもたらさないことになるのではないか。そして、自分がいくら一生懸命に仕事に励んだとしても、会社側の事情でいつ自分の立場が危うくなるか分からないというのであれば、それこそ主体的に誠意を持って仕事に取り組む意欲も薄れてしまうだろう。筆者の「開かれた機会重視型社会」という言葉は、響きは良いが、実際には弱者切り捨て社会の美名にすぎない。日本の社会は、確かに現在経済的難問と国際化という大きな課題に直面しているが、だからこそいたずらに欧米的な制度を断片的に導入しても意味がない。人間はまず生活の安定と将来への展望が保証されて初めて、重要な課題に誠心誠意取り組んで実績をあげることができる。日本の社会はそうした人間の本質に即応した制度を発達させてきた。日本の社会は、この他の国には見られない独自の制度の長所をもっと評価し、今後も維持していくべきである。……などと筆者の主張に反論することも可能である。

さらに全体として、①単なる制度的考察に終始せず「日本の社会のあり方」に対する考察まで論を進めること、②雇用制度・学校制度・政治制度など何らかの具体的事例を引用しながら考察をしていくこと（抽象論では論文としての具体的説得力に欠ける場合が多い）、③筆者に対する賛否は明確に示すこと（あいまいな姿勢はとらないこと）、などの諸点に留意して答案を作成して欲しい。

●メモ●

25章

【添削課題】

出典…大阪市立大学・法・00年

解答

問1

市場は国家の支配力を弱め、福祉・労働政策などを無力化する。市場が万能であればそれでよいが、以下のように市場は万能ではない。まず、市場は富の再配分、貧富の差の解消ができない。その結果、敗者は労働意欲を喪失する。そして資本の一極集中は過密と過疎を生む。このように市場は市場そのものの存続を危うくする。第二に、市場は富を歴史的に配分する能力がない。未来世代の利益は、現在の取引の当事者のために犠牲になり、資源浪費、環境破壊が進む。第三に、市場は社会資本の形成に寄与しない。取引のルール、治安を支える秩序の感覚に市場は依拠しているが、これらの形成は市場外によって促される。第四に、市場では合理的人間関係が支配し、非合理的な共同体は軽んじられ、近代国家の均衡を壊す。

問2

「市場の世界化」の中で国家の役割は、市場が抱える欠点を補完することにある。筆者が言うように現在、市場は国家の支配力を弱め続けているが、国家は立法・行政・司法それぞれの機能により市場の暴走を制御しうる。

まず、市場は貧富の差や過疎・過密を解消することができない。したがって国家は、弱者保護政策や過疎地域の生活インフラの整備、過密地域の生活環境改善などを率先して行うべきである。

第二に、国家は、市場に登場していない将来世代の利益を考慮していく必要がある。例えば二酸化炭素の排出は、数十年後から数百年後の地球の人類の存続を脅かすが、将来世代は、立法府に議員を送り込んだり行政府に陳情したりすることができない。司法でも、

原告適格がない。国家（立法、行政、司法）が自主的に、将来世代の利益を考慮しなければならない。

第三に、国家は市場のルールや秩序感覚の育成を積極的に行わなければならない。粉飾決算やインサイダー取引には厳しい規制をかけ自由と秩序のバランスを考慮しつつ、犯罪を抑止する刑事司法制度を整備しなければならない。

第四に、国家の合理性と非合理性のバランスを取るのも国家の仕事である。言語教育や歴史教育などを通して、一定の「国民教育」を実施する際、帰属感のヒステリー、過去の理想化を抑止しなければならない。

解説

1　課題文の概要

①　導入部〈第①～④段落〉二〇世紀末における世界市場の現状分析

(1)　ベルリンの壁崩壊とソビエト連邦消滅の結果・影響

社会主義経済の破綻＝自由市場原理の勝利

←

国家による市場保護や規制排除の潮流

←

国境を越えた資本と技術移転の飛躍的進展

←

◇産業資本・金融資本が国境の壁を破り、あらゆる国家の統治権を揺るがし始めた。

(2)　（帝国主義との比較による）現代における国家と資本の力関係の特徴

帝国主義的資本…弱小国の市場を襲い、そこに居座ることで乏しい富を収奪

現代の資本…国家によりよい条件を求め、受け入れられねば立ち去ることでその国家権力を危うくする

▽産業資本→規制や法人課税が過重であれば流出→「空洞化」

▽金融資本→金融政策を誤った国家をねらい撃ち、引き揚げた後に惨憺たる被害を残す。

◇今日の資本の特徴→加害者としての顔が見えず、立ち去ることは道義的に非難しにくい。

(3) 冷戦後のアメリカ経済の圧倒的勝利という評価について

(a) 事実の検証・確認

国際短期流動資本は必ずしもアメリカ資本ではない。

(b) (a)の示す意味

アメリカ政府の制御すら及ばないことがむしろ問題。

(c) (a)(b)にも拘わらず反米感情が盛り上がる理由

・米国の産業構造、社会制度が金融の国際化に適合→自ずから世界標準と化していくから。

・冷戦の終結→旧「自由陣営」内部の政治的配慮無用化→破綻した諸国へのＩＭＦの処方箋が冷厳になっているという事実。

(d) 結論→反米感情やアメリカ陰謀説は筋違い＝顧みて他を言うの類にすぎない。

(4) まとめ

(a) 現状

二〇世紀末にいたり、市場が国家から独立し、アメリカをも含めすべての国家の支配力を弱めた。

(b) 今後の趨勢（予測）

規制や課税権の制限ばかりでなく、通貨発行権すら個別の国家の手を離れつつある。

→福祉や労働政策など、純粋な国内行政も一国の専決に従わなくなる可能性が見える。

② 論点提示と分析〈第⑤～⑩段落〉

(1) 論点提示

拡張する市場はそれだけでは人間を生存させ得ない＝市場は「神の見えざる手」で動かされるとしても、それ自体が万能の神

の手であるわけではない。

(2)

(a) **分析＝市場が万能とは言えないことを証明**

市場は富の配分には有効だが、富の再配分、個人や地域の間の貧富の差の解消には無力。

A　競争原理に基づき、勝者と敗者を生む→過度の敗者の恨みが犯罪や労働意欲の喪失を誘発→市場成立条件＝社会秩序と活力を損なう。

B　投資効果の違いが、資本の地域的な一極集中を招く→人口の過密と過疎→生活環境悪化と人心の荒廃の恐れが大。

C（A、Bの結果）市場そのものの存続を危うくする。

(b)

市場は常に現在という時間の中で働く装置だから、富の歴史的配分能力がない。

◇取引の当事者は公正には留意。市場もそれを保証する力があるが、その範囲は同時代の人間に限定＝未来世代の利益は配慮外。むしろ現在のための犠牲に供される。

A　事例…商品価格を下げるための資源の浪費、環境破壊。

B　市場そのものには、Aという事態を阻止する力はない（仮に、蓄積された資本が後世に残されても、資源と環境に恵まれない資本は富として無意味）。

◇（歴史的富の一つである）社会資本について→市場の依存はあっても、市場への寄与は少ない。

A　吟味

・道徳感情が厚く信用度が高い社会は、市場が機能する条件であるが、市場だけの力では作り出せないもの。

B　具体例

・治安を支える秩序感覚、合理性を尊び、時間や尺度の精密さを愛する感覚＝市場に先んじて存在し、市場以外の人間関係によってより多く養われる資本。

(c)

市場が世界化し、普遍的・合理的な人間関係が支配力を増すと、本来非合理的な人間の帰属感を脅かす。

A　人間の本性（二面性）という観点からの分析

人間…1　法と契約のもとで自由に生きたいと望む

2　（1の反面）習俗と暗黙の約束に守られて安心して暮らしたいと願う

市場…1の願望だけを励ます装置→自由な（誰もが参加し競争できる）市場とは、誰にも安住を許さない場所

→まとめ

市場が拡大し、それまで「自分のもの」であった国家を無力化し始めれば、多くの人が不安を覚えるのは当然。

B　国民国家の本質的性格（二面性）という観点からの分析

◇国民国家の特性→市場の合理性と共同体の非合理性を併せ持つ。

A　法と制度のもとに開かれた組織 ←→ B　言語、習俗、宗教などを共有する閉じられた集団

C　内部には普遍的文明を目指す ←→ D　外に対しては文化的個別性を主張

E　個人と国家は契約を結ぶ（＝国家は市場そのもの）←→ F　個人は愛郷心で結ばれた国家の中に生まれついた

→まとめ

国民は微妙な均衡のもとに普遍性と個別的特性を持つ世界に生き、その中で自らの自由と安定を両立させてきた。市場の世界化とは国家のこの両義性が崩れること。

C　市場の世界化の進行（現状と今後の動き）という観点からの分析

◇市場の世界化進行の特徴

1　世界地図の中で均等には進まないこと。

2　1の理由…近代国家成立の経緯

・もともと自由と普遍性の強い国もあれば、閉じられた安定に深く馴染んだ国もある。

・国家形成の途上＝内に民族や地域の対立を抱え、外に対し閉じることに懸命な国もある。

3　市場の世界化は、開かれた国にとって有利→世界化の過程では、一国が他国に対し優位に立つという現象が起こる。

→まとめ

市場の世界化が大国主義的な拡張の見かけをとり、それがまた逆に、他国の閉鎖性を強めかねないのが現状なのである。

③ **結論〈第⑪段落〉**

(1) **現状について**

現代の世界は帰属感のヒステリーに見舞われやすい状況にある。

(2) **(1)の内容**

・富の再配分の将来への不安

・伝統という名の社会資本をめぐる危機感

→感傷的な帰属欲求に火をつける。

ex）ロシアや中国の民族主義、イスラムやヒンドゥーの原理主義、先進国のポスト近代主義

(3) **筆者の見解**

懐古趣味は現状批判にはなっても、問題解決にはつながらない。それは過去の問題を復活することに終わるし、そこに感情的な扇動が加わると、過去は歪曲され、過去にもなかった醜悪な姿をよみがえらせるのである。

2 問1について

① **設問要求**

> ① **傍線部(1)のように、著者が市場万能主義に対し疑問を抱いている理由を説明する。**
>
> ② **三五〇字以内にまとめる。**

② **解答作成へのアプローチ**

(1) **論文構成に着眼してのアプローチ**

「課題文の概要」で見てきたように、傍線部(1)は、課題文の論点（中心の問題点の提示）に相当する部分である。よって、そ

の理由とは分析内容ということになるから、分析部分を要約すれば、設問要求を満たす解答作成が可能となる。更に、分析は三つの視点（＊）に分けてなされているので、それら三つの分析内容のポイントを整理し、論理的繋がりに留意して、簡潔・明快な文章に仕上げればよい。

（＊）解答に必要な三つの分析内容

① 市場は富の配分には有効だが、富の再配分、個人や地域の間の貧富の差の解消には無力。

② 市場は常に現在という時間の中で働く装置だから、富の歴史的配分能力がない。

（未来世代の利益は配慮外。未来世代の利益は、むしろ現在のための犠牲に供される。また社会資本への寄与も少ない。）

③ 市場が世界化し、普遍的・合理的な人間関係が支配力を増すと、本来非合理的な人間の帰属感を脅かす。

→これらの観点に立ち、それぞれについての著者の分析内容を明快に説明すればよい。

(2) 傍線部(1)の内容に着目してのアプローチ

設問文にも示されているように、傍線部(1)は「市場万能主義」に対する筆者の疑問を述べた文である。よって、「神の見えざる手」（＊）が万能であるとする「市場万能主義」とはどういう主義（考え方）なのかを把握した上で、その考え方のどのような点を、どんな理由を挙げて筆者は批判しているのか、という観点から解答に必要な要素を押さえていき、簡潔・明快な論理的文章にまとめるという方法もある。

以上二つの方法を相互補完的に併用していくと、より確かな解答作成に近づくことができよう。

（＊）「神の見えざる手」について

アダム・スミスは『国富論』の中で、「市場は、さまざまな資源をさまざまなものとサービスの生産のために無駄なく配分する機能を持っており、それによって消費者達の利益を最大にすることが可能となる」という市場の機能を説明した。「見えざる手」とはそのキーワードである。

この「見えざる手」の比喩は、利益しか念頭にない個人がその意図にはかかわりなく、結果として社会全体の利益を増進するように働く見えざるメカニズムを示すために用いられたものである。

これを私たちの暮らしのレベルで解釈すると次のようなことになるだろう。

すなわち、市場経済における企業の目的はさまざまだが、その目的達成のためには、売り上げを伸ばし、費用を節約してより安く、より良いものを消費者に供給するように努めなければならない。かくて企業は消費者全体の利益を最大にしようとしたり、公共の福祉を増進させようとしたりする意図は持たないが、結果的には市場の競争を通じて消費者の利益になるように行動することになる、ということである。

「市場万能主義」とは、こうした、市場には自然に秩序を形成するメカニズムが備わっているゆえに、自由で競争的な市場に任せれば社会一般の利益が自ずと増進していくという、スミスの考え方を基本とし、市場メカニズムが万能であるとするような見方・考え方である。

3　問2について

①　設問要求

> ①　課題文を読解する。
> ②　「市場の世界化」という趨勢の中で、国家の役割はどこに認められるかについて、自分の考えを述べる。
> ③　六〇〇字以内でまとめること。

②　論述作成へのアプローチ

本問のようにまず読解問題が課されている場合は、その結果を踏まえての論述作成が求められているケースが多い。また、文章資料付小論文の基本は、筆者の立場（主張）と論拠を理解し、それを事実（現状や歴史的事実）や自分の知見に照らして検証し、自分の立場設定の参考としていくことである。設問要求を満たすことが出来れば、論述作成の仕方や方向性の取り方は各自の自由

ではあるが、迷った場合は、こうした基本に則っての論述作成を目指すと良い。

(1) **設問要求を踏まえて、課題文の内容を正確に読みとり、検証する。**

問われているのは、「市場の世界化」という趨勢の中で国家の役割はどこに認められるかについて論じることである。

では、課題文の著者は、

① 「市場の世界化」という趨勢の中での国家の地位をどう見ているのだろうか。まずこの点を押さえておこう。このことが述べられているのは、課題文前半の現状分析の部分である。

即ち、著者は、冷戦後の資本と国家の力関係を、かつての帝国主義の場合と比較しつつ検証を進め、「現代の資本は、国家に対しよりよい条件を求め、それが受け容れられなければ、立ち去ることによってその権力を危うくする」という特性を引き出している。この被害を受けるのは金融政策を誤った国であり、逆に、産業構造、社会制度が金融の国際化に適合していた国が有利であること、こうした条件をアメリカが「たまたま」備えていたために、アメリカの圧倒的勝利という見かけをとっているが、実は、国際金融資本についてはアメリカ政府の制御すら及ばないそれが本質的問題であると分析するのだ。こうした分析結果を踏まえ、著者は、資本と国家の関係の現状と今後の趨勢について、「二〇世紀末にいたり、市場が国家から独立し、アメリカをも含めすべての国家の支配力を弱めた……規制や課税権の制限ばかりでなく、通貨発行権すら個別の国家の手を離れつつある。福祉や労働政策など、純粋な国内行政も一国の専決に従わなくなる可能性が見える」と語っている。

⟶論述作成の準備のためには、まず「二〇世紀の終わりにいたって、市場が国家から独立し、アメリカをも含めて、すべての国家の支配力を弱めた……規制や課税権の制限はいうまでもなく、……通貨発行権すら個別の国家の手を離れつつある」という筆者の指摘を現実に照らし検証しておくとよい。

ex)・「規制や課税権の制限」が個別の国家の手を離れつつあるということについて

⟶例えば、日本における「規制緩和」「自由化」の流れを想起することが出来よう。

企業の多国籍化が進み、販売市場、生産現場、経営拠点など活動の場のすべてを企業が選ぶ時代になったため、

閉鎖的で、非効率的な制度や慣行を持った国の経済は停滞し、逆に効率的な制度を持った国に経済活動が集中するようになった。こうした制度をめぐる国際競争の中で、日本でも、九〇年代半ば以降、政府が本格的に制度改革や行政改革に着手し、また企業レベルでも、終身雇用、年功序列賃金や企業系列などの見直しが始まっている。

・「通貨発行権」が個別の国家の手を離れつつあるということについて

→まず思い浮かぶのは、課題文にもあるユーロ（欧州連合ＥＵの共通通貨）であろう。

九九年一月一日より導入され、欧州十一カ国が参加。欧州中央銀行による一元的な金融政策運営がスタートした。二〇〇二年一月一日より、ユーロ紙幣・コインの流通を開始し、七月一日に各国通貨の流通を停止した。そのメリットは、①域内では通貨交換の必要がなく、為替リスクが消滅、為替交換の費用が削減、②財、サービスの競争条件が統一され、市場競争の効率性が高まる、③企業が最も有利な場所に立地するため、各地域間でインフラ整備などの競争が進み、それがＥＵ全体の生産性を高める（期待）など。

② 更に、著者は「市場の世界化」によって引き起こされる問題として「拡張する市場がそれだけでは人間を生存させえない」ことを挙げている。それは「市場は、……それ自体が万能の神の手であるわけではない」ということ、即ち**問1**でまとめた内容になるわけだが、ではそうした、市場の拡大を放置すればますます悪化していくであろう問題をどうすればよいのか（……設問と併せ考えれば、そうした問題解決こそを「国家の役割」として捉えて欲しいという、出題者側の意図が見えてこよう）。

ここでも①と同様、著者の指摘するそうした問題（市場の限界＝以下の★三点）を自分なりに検証・確認しておくとよい。

★市場は、富の再配分や貧富の差の解消には無力→競争原理は勝者と敗者を生みだし、投資効果の違いが生活環境の悪化をもたらす。

▼具体的事例として、市場万能主義に基づく政策の帰結が挙げられよう。

「Ｍ・サッチャー氏が英国首相になったのは、七九年のことである。卓抜した指導力の持ち主である同氏は、新保守主義改革（自由化・民営化）を積極果敢に推し進めた。その結果、英経済は活性化したものの、所得格差の拡大、公的教

育・医療の荒廃という予期せぬ副作用を招いた。」（日本経済新聞）

★市場は、富の歴史的配分能力を欠く→市場が機能する条件を作るのは伝統的人間関係であり、また、市場の世界化は資源の浪費や環境破壊を生み、未来世代の利益を犠牲にする。

▼例えば、先進国における大量消費構造が資源の限界問題を生んでいること。また「温暖化」など地球環境問題の発生の原因・展開のプロセスを想起することで、検証できよう。

★市場が世界化し普遍的・合理的な人間関係が支配力を増すと、本来非合理的な人間の帰属感を脅かす→市場の世界化は、国家の両義性を崩し、国民の不安感を増す。

▼例えば、課題文中に述べられている民族紛争、あるいは先進社会（日本社会の我々の暮らしなど）における競争原理の浸透による人間関係や人心の荒廃、カルト集団の隆盛などを想起することで検証できよう。

(2)

(1)を踏まえ、論述作成の方向を考える。

ここでは、課題文を踏まえての基本的な構想の立て方の一例を示しておく。迷った人は参考にするとよい。

(a) 課題文から次の二点を押さえる。

・「市場が国家から独立し、アメリカをも含めて、すべての国家の支配力を弱めた……規制や課税権の制限はいうまでもなく、……通貨発行権すら個別の国家の手を離れつつある。……福祉や労働政策など、純粋な国内行政も一国の専決に従わなくなる可能性が見える」という状況、即ち「個別の国家」の限界

・「市場の拡大」が引き起こす問題（市場の限界）＝**問1**でまとめた内容

(b) (a)を検証し、著者の指摘の妥当性を確かめる（同時に、論の材料を選び整理する）。

(c) 以上を踏まえて、自分の立場を決定し、市場の世界化によって産み出される問題を今後の国家の課題として捉え、国家の役割について自分の考えをまとめていく。

(3) その他の立場や方向での論述作成について

(a) 課題文著者は市場万能主義を批判する立場で考察を行っているが、そうした著者の立場に反対する立場での論述作成ももちろん可能である。この立場では、市場万能主義に対する著者の批判の論拠（**問1**でまとめた内容）への反論（論拠）を示し、市場優位の世界における国家の役割について論じていくことになろう。いわゆる「小さな政府」論の考え方に近い主張になっていきそうだ。

(b) (2)の(a)でその限界を指摘した「国家」とは、従来の「国民国家」であるという点に着目しての論述作成も可能である。近代国民国家の成立・展開は「資本主義」の進展と密接に関係しあっている。ゆえに、国民国家の枠組みで資本主義の進展が生み出す問題を解決していこうとするのは非常に困難ではないか（課題文著者の「個別の国家」という表現に注目。国民国家は個別の国家が利権・覇権を巡って闘争する性格を持つ）と考えれば、出題者側が君に構想して欲しいと望んでいるのは、市場の世界化がもたらす問題を解決していける新たな国家の姿（役割）であると見ることも出来よう。こうした観点から、国家の動向を巡る最近の情勢を丹念に検証していく方向で論述作成のヒントを得ることもできる。（**↓解答**参照）

(c) 市場の世界化を推進するものは何だろうか。ごく単純に言うならば、それは私たち人間の欲望であるといえよう。欲望を喚起するのは「差異の構造」である。だとしたら、市場の世界化とは「差異の構造」が地球全体を覆い尽くす動きとも言い換えられる。しかし、歴史を振り返れば、一つの社会の中での不平等（格差）の拡大は必ずそれに対する抗議を生み、そしてその抗議をどのように受けとめ政策に反映していくかによって、その国の命運が決まってきたという事実に思い至るだろう。またそれが結局は（長期的視点で見るならば）新たな市場進展のベースとなってきた＝市場の要請と矛盾するものではない、ということに気付くはずだ。即ち、市場はそれ自体の限界を克服していくために、国家を（あるいは政策を）必要とするのである。よって、こうした点に国家の役割を認めていくという論述作成も可能であろう。ただしそれが、現在の国民国家＝個別の国家に可能であるかどうかは別問題である。ゆえに、この立場で論じる際には、民主主義と資本主義の関係を歴史的に分析し、それをもとに国家の役割として認められることを抽出した上で、今後市場が創出していく差異（不平等）に対峙し得る国家のあ

り方や形を考察することも必要だろう。

……などなど

●メモ●

26章

【添削課題】

出典…東京大学・後期・文科Ⅲ類・95年

解答

「現実との距離」

課題文筆者は、「大勢の人々が飢えの下に苦しみ絶望的な状況の中にいる」映像に、かつて戦時中の日本で同じような思いをした自分の体験を重ねて涙し、そこに「多感繊細な音楽」を流すというテレビの無神経さを「鈍感な残酷さ」として批判している。筆者のこのような主張は、テレビへの批判、飢餓難民への思いやりのどちらにおいても無力であるように思える。私は、この筆者に、テレビというメディアの中の現実と自らの生きてきた現実との間に距離を取ることの出来ない人々の姿を見た。しかし一方で、予め定められたテレビとの距離に、敢えて自らの価値観を委ねてしまうという筆者のあり方に、とても共感を覚えるのである。

テレビは現実そのものではない。現実を創り出し、虚構の現実を私たちの中にばらまく装置だ。私たちの生きる現実とテレビの中のそれとは、大きな隔たりがあり、テレビの中の現実は編集という恣意性によって飾られているのが常である。また、たとえ筆者がそこに映る飢餓難民を思いやり涙したところで、それはブラウン管の向こう側のことであり、彼らの状況は依然として絶望的なことに変わりはない。私たちは、そんなことはよく分かっているはずである。テレビの本来的な性質を問うことの無意味さ、そして映像の向こう側の現実を思いやることの無力さという二つの意味で、筆者の涙は何もならないように思える。

だが私は、筆者のそのようなメディアとの接し方に共感を覚える。メディアを通して示される現実に自らの生きてきた現実を重ねるという、本質的に無意味なことをすることによってしか、自らの価値観を完結させることが出来ないというあり方が、私にはとてもよく分かるのだ。現実の他者との距離の模索に生きる人間にとって、現実の他者よりも予め距離を置かれているブラウン管の向こう側の現実の方が、自分の価値観を投影するスクリーンとなり得るのである。

現代社会では、自己と他者との関係性において異常に敏感でなければならない。自己の価値観と他者の価値観のズレを不断に確認し、調整していかなければならない。他者と擦れあわない距離が常に模索され、自己の価値観は他者との間でいつもその妥当性が問われる。私たちは自分の価値観がそれ自身で完結し得る場を求めているのだ。そのような場として、テレビという「空漠たる他者」との擬似的な対話が選ばれる。テレビに映る現実に対し、自らが生きてきた現実と照らし合わせてそれを批判すること。それは、予めその無効性が定められているからこそ成立し得る、自己による自己の価値観の証明である。筆者の涙は難民のために流されているのではない。戦時中に飢餓に苦しんだという自分の生きた現実のために流された涙なのである。

解説

●設問要求●

① 文章の内容に関連して、各自論題を設定すること。
② ①のもとに、自分の考えを展開すること。
③ 一二〇〇字以内でまとめること。

① 論述の方向について

【筆者の主張の核心】

テレビが「大勢の人々が飢えの下に苦しみ絶望的な状況の中にいるという光景を見せる一方で」「多感繊細な音楽を鳴らす」ことは、「鈍感な残酷さ」であり、「相手の立場になったら、どんなに傷つき苦しむことかを想像し、思いやる心の働きがないこと——想像力の欠如、つまりは精神の怠慢」である。

② 自論を展開する

自分の考えを展開するよう要求されているが、ここで注意しておかなければならないのは、「内容に関連して」と設問文にあるように、課題文の内容を踏まえて論述を展開する必要がある。

論述展開に迷った人は、次に考えうるいくつかの方向を示しておくので、参考にするとよい。

1　「筆者の主張」に賛成する

《立場》相手の立場に対する想像力の欠如を批判し、思いやりの重要性を説くことになる。

《具体的に考えること》

浅薄な論にならぬよう、次の二点について具体的に考えておこう。

(a)　何に対して想像力（＝思いやり）は必要なのか。

(b)　どのような場合その欠如が失態とみなされるのか。

2　筆者の主張を理解した上で、それに対する疑問・問題を指摘する

(a)　鈍感で残酷なのは、映像に、その効果を増幅すべく特定の意図をもって、音楽を重ね合わせることだけなのか。

・報道の自由、商品としての映像情報の需要を口実とした、傍若無人なテレビカメラの暴力を問う。

・現実の断片を現実と錯覚させる、テレビのメディア機能の拡散力を問う。

・テレビは、部分をもって全体を想像させるのではなく、部分だけが全体であるという、想像力の放棄を不断に強いる装置であることを指摘する。

……など

(b)　本当は、何が「想像力の欠如」なのか。

・映像にどんな音楽がかぶせられても、音を切りつめ寡黙な映像効果を狙ったとしても、餓死しつつある難民にとっては、たいした違いはない。

・一方、映像と音楽の関係に対する筆者の批判が、難民への思いやりを実現するわけでもない。

・テレビであれ、活字であれ、情報を通してしか知りえない他者を、いかにして思いやるというのか。「思いやり」とは、現実の他者とのあいだで、知らないうちにされてしまうものであり、語られるものではない。

・「想像力」とは、むしろ難民とか社会的弱者といった抽象的な他者に対する「思いやり」の不可能を自覚することではない

のか。

……など

(c)

悲惨な映像に、多感繊細な音楽を重ね合わせることが問題なのか。

・メロディーを排した、無機的な音の羅列であればよい、というのか。

・画面における映像と音楽の思いやりのある関係は、いかにして実現されるのか。

・それは結局、画面演出上の技術的問題、あるいは趣味の問題でしかなく、そこに思いやりのある画面／ない画面という境界を設定すること自体、テレビ画面への「想像力の欠如」ではないのか。

……など

T3M
慶大小論文

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製